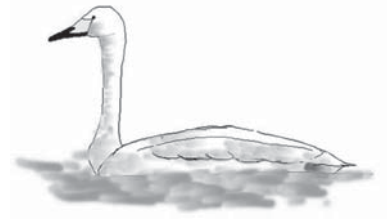


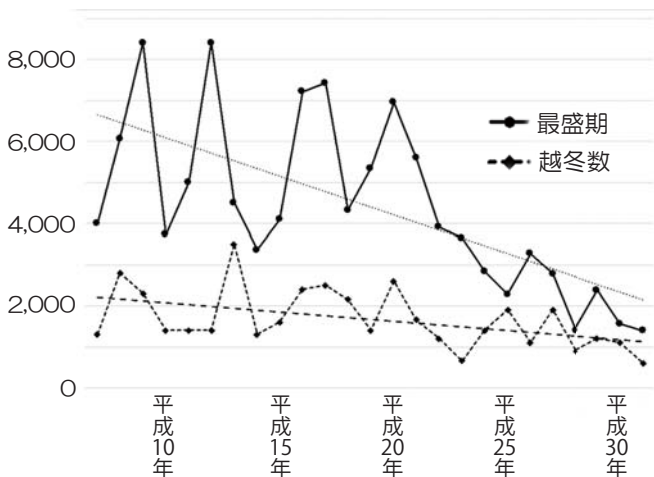
厚岸水鳥観察館だより  
べかんべうし  
別寒辺牛

●問い合わせ／水鳥観察館 ☎52-5988



厚岸湖・別寒辺牛川水系のオオハクチョウ

厚岸湖・別寒辺牛川水系には、毎冬オオハクチョウが飛来し、その多くが越冬します。しかし、私が厚岸に来た平成7年からのオオハクチョウのシーズン飛来数は、平成20年度(平成20年～平成21年冬)を最後に、一つのピークの目安であった6,000羽を超えることがなくなりました。それ以降はピークの飛来数は減る一方です。越冬数も同様の経緯をたどっています。



今季も例年並みの10月10日にオオハクチョウの初飛来を迎えました。10月末には1,000羽を越えましたが、11月に入ってから約1,300羽で、これがこの冬の最大飛来数になってしまいました。では、オオハクチョウはどこに行ったのでしょうか？

北海道には2本の大きな渡りのルートがあります。一つは“道央ルート”。もう一つが“道東ルート”で、厚岸町や風蓮湖(根室市・別海町)などはこちらに入ります。その入り口であるオホーツクの湖沼群にはそれなりの数が入っています。でもそれらのオオハクチョウが十分な水草もあり環境的には何の問題もない厚岸湖に来なくなっています。

さて、明治時代に入ってから北海道でとうもろこし栽培が盛んに行われるようになり、現代に至るまで作付けの増減を繰り返し、青刈りとうもろこし(飼料用)として平成19年頃から再び増加。厚岸湖のオ

オハクチョウの減少時期は、おおよそデントコーン作付面積の再増加と符合しますし、自分の記憶とおおよそ合致します。

つまり、道東のオオハクチョウについては、デントコーンへの餌場のシフトが始まっているのです。一般的には“農耕地シフト”といい、イギリスでは1960年代から起こっている出来事で、他のヨーロッパ諸国でも、ある時期から農地で採食する習性に变化しています。北海道でも地域による差が大きいのですが、平均すると農地依存が顕著です。

厚岸町でのデントコーンの作付けも増えているのですが、実はオオハクチョウはそれほど入っておらず、むしろタンチョウの方が目立ちます。

十勝川河口エリアでオオハクチョウ、ガン類の異常集中が見られますが、ほとんどデントコーンによるもので、長沼町などでもかなり集まっています。これらの気になるエリアは、紋別市から斜里町までの海岸線内陸側、釧路湿原周辺、十勝川下流エリアなどで、雪が降ると採食不能になるため越冬はできません。その後は、東北方面に南下してしまいます。



オオハクチョウについては、湖沼のアマモよりも畑のデントコーン(東北では稲の落ち穂)が流行の最先端といったところなのでしょう。そのまま越冬期に入っても、既に南下してしまった群れは厚岸湖に戻ってくることはありませんので、越冬数も減少傾向が強いと考えられるのです。

(水鳥観察館主幹 澁谷辰生)